



# 鳥



秋田雨雀 記念  
土方与志

青年劇場

【作】堀田清美 【演出】藤井ごう

1951年、瀬戸内海の小島。

広島で被爆し九死に一生を得た栗原学は、教師の仕事が続けながら将来のことを思い悩む。朝鮮戦争の軍需景気に支えられている島の生活。同僚や、東京で働く同級生の言葉。そして教え子の存在…。

2010年東京公演、そして3・11…。

奪われたいのち、遺されたいのちへの想いをこめて、

「普天間」の藤井ごう氏と青年劇場が全国へ！

◎第4回(1958年)岸田國士戯曲賞受賞作品

## 『鳥と現在』から『四年後の再演』

藤井ごう

「わしらが白髪の爺さんになる頃には、この地球上も大分様子が変わつとるよ。それを一粒一粒、種を大事に蒔いて生きるんよ。―その時は、人類に貢献した言うんで」

被爆者である学の劇中の台詞―

青年劇場での初演時、2010年。

あの時はまだ3・11も起こっておらず、まだ一応神話は神話の体をギリギリ保っていて(まあ多くの方が言うように)、神話と言っている時点で本当の意味合いはわかるわけだが、世の風潮もここまでセンソウがカクジツに迫っている況ではなかった(異論あるうが、そうゆうことでしょ)。

この2014年に「鳥」が再演される。

僕ら舞台の作り手は、非力であることを思い知らされる日常が続いている。

学、そして作者堀田氏の思いとも確実に異なる「現在(いま)」がある。

その事をどう考えようか―

2010年にこの作品が産声を上げた時とは違う意味合いが生まれ、受け取られ方も大きく変わるだろう。それを悲しむべきなのか喜ぶべきなのか…

だが訴えかけるものがあつたとして、その真は変わらないはずである。

だからこそ、わかりやすい言葉、わかりやすい敵、大きい声、外国ではこうである的な常識に囚われることなく、こうやって生きてきた人物たちの思いを苦しみを喜びを、現在の都合で「なかったこと」になどしないように、コトバに耳をすませ、ココロに寄り添う。

想像力が経験を栄養とするならば、彼らの経験と選択は、今正に必要とされる想像力の基礎となるはずである。

舞台上にいつも通り人物たちを現出させよう―

人間の未来の為に、あなた自身の為に

作者の願いと共に、「生」という事の意味が大きく僕らに迫っている。

上甲まち子



渡辺尚彦



藤木久美子



吉村直



北直樹



崎山直子



清原達之



真喜志康壮



岡山豊明



矢野貴大



塚原正一



清水美輝



会場 = 旭川市公会堂

旭川市民劇場は人と人との繋がりを大切に、演劇を観ている会員制の演劇鑑賞会です。

演劇で笑ったり、泣いたり、怒ったり。楽しく、大切な時間を、私たちと一緒に過ごしませんか。

経験していないことを想像で埋めるには、演劇は最高です。

会員募集

会員になると年6回の演劇を鑑賞できます。

◇詳しくは旭川市民劇場まで◇

TEL: 23-1655

住所: 旭川市3条通8丁目緑橋ビル1号館2F



## 2014年 旭川市民劇場 11月例会

### 11月18日(火) 6:30

### 19日(水) 1:30